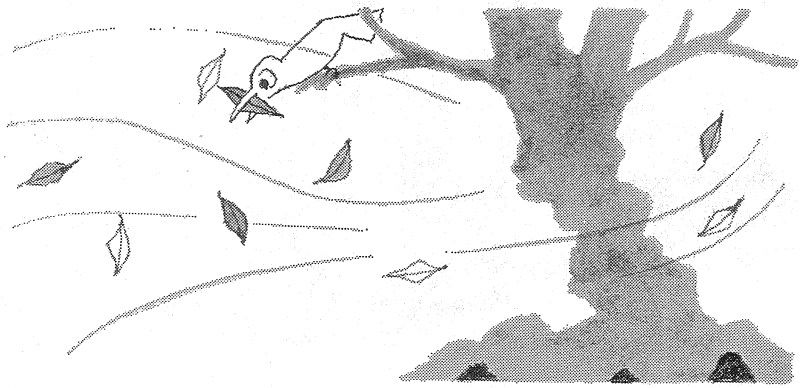
学校　地域社会



文部時報

昭和六十二年十月
第一三二九号

特集　文化財と国民生活

文化財と国民生活……宮田　登…4

◇座談会

地域社会の中の文化財……8
（出席者）大場　信邦／塩多慶四郎／島津　晴久
奈良　秀重／吉房　康幸／（司会）内田　弘保

◇論文

郷土と歴史のふれあい……杉崎　茂樹…23
町並み保存のとりくみ
―沖縄県竹富町竹富島伝統的建造物群保存地区―……島仲　信良…29

◇随想

仁清の壺……杉本　苑子…36

手をつなごう　家庭

◇事例紹介

若者と文楽　―原宿文楽公演より―……平島　高文…38
中学生による笹間神楽伝承活動……大久保政夫…44

◇解説

歴史的な町並みの保存……文化庁文化財保護部建造物課…49
「風土記の丘」及び「歴史の道」について……文化庁文化財保護部記念物課…59

◇資料

文化財件数一覧等……文化庁文化財保護部伝統文化課…69

●文部省のまど

昭和六三年度文部省所管の概算要求……大臣官房会計課…74
昭和六三、六四年度開設予定大学申請について……高等教育局企画課…82
医学教育・歯学教育の改善に関する調査研究協力者会議が最終まとめを提出……高等教育局医学教育課…84
著作権審議会第一〇小委員会が発足……文化庁文化部著作権課…93

★教育・文化週間について……大臣官房総務課審議班…95

●文化財紹介

本法寺庭園……（加藤　充彦）

●名作シリーズ

武蔵野図……（解説　千野　香織…35）

表紙　田中　四郎／カット　赤羽根秀一

事例紹介 ❶

若者と文楽—原宿文楽公演より—

平島　高文

はじめに

昭和五九年春、大阪に文楽劇場が開場して、文楽の歴史の上で、新しい時代を迎えたことになった。

その準備から開場にかけて、新卒の若い職員十数名が採用され、各職場に配属された。

文楽劇場の公演は、文楽だけに限らず、東京の国立劇場同様伝統芸能全般を対象とするものであるが、とくに文楽は六～七か月一〇〇日以上の公演日程が組まれていること、文楽の芸を伝承する研修制度があり、現在も六名の若者たちが研修に励んでいること、そして文楽三業（太夫、三味線、人形）の技芸員の公演活動の本拠が、この大阪の文楽劇場にあることなどから、劇場職員が文楽に対して特別な心情を抱くのは、当然のなりゆきといえる。

さて、五九年から今年まで、学窓を巣立ち劇場に就職した若い人たちの文楽体験はどんなものであったか、男性一〇名、女性一六名について尋ねてみた。

〈問〉国立文楽劇場に入る以前に、文楽鑑賞をしたことがあるか

ある　男　七名　女　九名　計一六名

ない　男　三名　女　七名　計一〇名

〈問〉〝ある〟と答えた人について、どのような公演で鑑賞したか

本公演　男　五名　女　三名　計　八名

鑑賞教室　男　〇名　女　二名　計　二名

テレビ　男　二名　女　四名　計　六名

（その他学校での巡業公演　男一名。但し本公演男と重複）

文楽劇場への就職を意識して、その準備のための鑑賞も含まれていることを考え合わせると、文楽に対してさほど濃密な関心を抱いているとはいえない。ただし、現在自分たちが選んだ職業と密接な関係にある伝統芸能文楽に対し、その振興のための方策に、それぞれの立場から深い関心を持っていることは間違いない。そして、その策定が容易でないところに、苦労があるわけである。

ちなみに芸術文化に対する一般の人達の関心度の調査では、歌舞伎約二七%に対し、文楽約九%で、文楽は歌舞伎の三分の一ということになる。

多分、劇場就職以前から文楽に深い関心を持っていたというのは、精々三～四名どまりということだろうが、文楽と若者たちのこのような出会いの中にも、将来への可能性を探ることは、やぶさかではないのである。

原宿とのであい

話は五九年に戻るが、開場時のあわただしさもおさまった時期を見はからって、大阪で採用された職員を研修のため逐次東京の国立劇場へ出張させたことがあった。

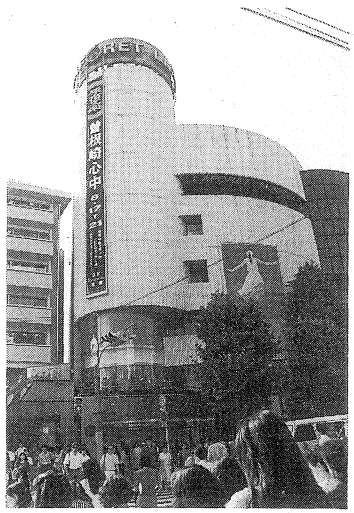
私も、二名の新卒女子職員を同道して上京したのだが、仕事を離れて東京の最先端感覚に触れるには、どの辺りを訪れたものかと戸惑ったものである。

新宿、渋谷、銀座それぞれに特長もあるが、若者感覚といえば、原宿か六本木ということで、偶々原宿へ行くことになった。ラフォーレ原宿に知る辺がいたこともある。若者のためのファッション、ブティックの店、バラエティショップ、道端に並べられたアクセサ

昭和62年度　国立文楽劇場　自主公演回数表　（小）＝小ホール

月	文楽公演	その他の公演	日程	日数	回数
4	文楽		3～19	17	34
		歌舞伎	22～26	5	9
5		舞踊・邦楽	22, 23	2	2
6	文楽教室	（日曜除く）	3～20	16	32
7	文楽		3～19	17	34
8	文楽		3～16	14	28
9		邦楽	5	1	1
10		舞踊	23, 24	2	2
11	文楽		3～23	21	42
	素浄瑠璃(小)		28	1	1
12		大衆芸能	5	1	1
1	文楽		3～24	22	44
2		大衆芸能	27	1	1
3	文楽		3～16	14	28

文楽公演	105日	210回
文楽教室	16	32
素浄瑠璃の会	1	1
（小計）	122	243
舞踊・邦楽公演	2	2
大衆芸能公演	2	2
邦楽公演	1	1
歌舞伎公演	5	9
舞踊公演	2	2
（小計）	12	16
（合計）	134日	259回



ラフォーレ原宿外観

リー、若者好みのビュッフェ、パーラー、ディスコもあった。いずれ、学園祭の延長のようなムードは今も変わらない。年甲斐もなく、ディスコでビート過剰の音楽を聞きながら、若者たちの遊びの場であるこの街で文楽を上演できたら、きっと従来と違った受け止められ方が期待できるのではないか、本来遊びであるべき芝居見物が、教養の一端として鑑賞を強いられることへの反発があるに違いないと思ったのである。若者指向のロック文楽は、既に宇崎竜童氏達により〝曽根崎心中〟が上演され、若者たちにも受けて成果を上げている。今度の原宿では、どうしても古典基調の演出でなければ意味がないように思う。職業柄文楽の舞台を客席の一番うしろから観る機会が多い。舞台鼻から二〇mも離れている。稽古の時など間近に見る人形から受ける強烈な印象はどこにもない。聴覚によって知覚される浄瑠璃は効果がそんなに損なわれないにしても、視覚に訴える人形の演技は、身の丈一m少々の大きさからも、極端にいえば膝詰めで見てもいいのではないかとさえ思うくらいだ。肌で接するように聞く義太夫節浄瑠璃の世界に、顔前でみる動く人形の迫力は、絶対に若者をとらえることができる筈である。文楽という催眠術師の指先に当たるのが人形なのであり、その最も効果的なアプローチが問題なのである。

原宿では、古典を基調とした、身近に浄瑠璃を感じ、間近に人形を見る工夫をした文楽——なのである。

「ああ、いいんじゃないですか」

プロモーターの一人鶴本正三氏（ラフォーレミュージアム企画担当㈱ツルモトルーム社長）は軽く受けてくれたが、その鶴本氏を含めたプロジェクト集団が原宿文楽の実現にこぎつけるまでに、足掛け四年の歳月を要している。また、同行のK君、H君二人も若者の街原宿で若者なりの関心は持ったようだ。しかし、この両名が前述の文楽体験調査では、特別な関心を持っていたグループに入っていたとは限らない。

原宿文楽急浮上

折からレトロ・ブームがいわれ始めた昭和六一年暮れから六二年春にかけて、突如原宿での文楽公演が急浮上した。若者たちが溢れている街原宿で、ラフォーレミュージアムの手ごろな空間を生かして、伝統芸能としての文楽を上演しようというものである。時代を先取りする原宿に、その予兆がなかったとはいい難いが、度重なる売込みのうちその一度がタイミングに合ったのだろう。演目の選定は、やはり現代の文楽では一番人口に膾炙されている〝曽根崎心中〟

ということになり、出演者は人形吉田簑助、浄瑠璃豊竹呂大夫他二十数名の一座が決まった。ラフォーレ原宿の多目的ホールの空間に文楽的演劇空間を創造するのは、演劇スタッフ集団パシフィック・アート・センターの若手メンバーが担当した。定例公演スタッフの㈱文楽協会と国立劇場が協力したのはいうまでもない。

公演期間は六月一七日から二一日までの五日間一日二回公演と決められた。

若者たちがたむろする街に繰り出して、五日間一〇ステージも一ケ所に腰を据えて興行するということは、文楽にとって初めての試みである。緊張感がみなぎる。

現代の劇場機構の中での舞台づくりが定式化している最近の文楽演出が、ラフォーレミュージアムのような、手ごろではあるが劇場機構としては不備だらけの空間を活用しようとするには、どうしても普段とは違った演出方法を取りこんで行くことになる。この部分は、無から有を生ずる創造の分野に属する。古典を基調としながらも、新しいものを取りこむということは、その失敗を思うと無謀としかいいようがない。頼まれもしない冒険をして、失敗は許されないということである。出演者である技芸員、舞台を支えるスタッフ、制作を担当するプロモーター、それぞれの立場での原宿の街の研究が進められた。機会があれば原宿に足を運んだ話を公演後も聞かされた。関係者の一人一人が自分自身の公演であるとの認識を強くしていたように思われる。それも原宿ということで、関係者の中でも若者意識が前面に押し出されていたように感じられた。何回もの打合わせが続き、でき上がったのが、今度の原宿文楽〝曽根崎心中〟のポスター、チラシであり、舞台装置であり、人形浄瑠璃そのものであった。

若者が目立つ会場風景

万全のスタートのつもりであったが、若者たちの反応は捗々しいものではなかった。公演初日を六月一七日に控えた四週間前の五月末の入場券の売行きは、たった三四〇〇余りの客席総数の半分にも満たなかった。大阪の文楽劇場へは、制作責任者の鶴本氏から毎日のように悲鳴まじりの現況報告の電話がかかって来る。〝原宿で若者たちに文楽を〟の試みは潰え去ろうとしていた。頭の中には、文楽の信用の失墜を含め、どのようないい訳のもとに事態を収拾したらいいのか、この場合、新演出を導入した分だけ仇になる。意識の昏迷だけが往き来した。決して間違った企画じゃなかった筈なのに、爾後、若者たちに対して自分たちの意図なり意思を伝えるための有効な手段がどんなものであるかは、いまだに迷いっぱなしである。

マスコミの援護

ある日刊紙が五月二

一日付けで、この公演を取材して記事にしてくれた。これがマスコミ各社の関心を集めるきっかけになったのか、新聞、雑誌に次いでテレビでも取り上げられるようになった。

東京から大阪に連絡される現況報告の声もだんだん穏やかになり、やがて喜びの声にかわり、内容も売切れの日も出て来たというものだった。出演者およびスタッフの張切りようが尋常でなかっただけに、まばらな客席に対する落胆の度合いが思いやられていたが、どうやら杞憂に過ぎなくなって来た。この一〇日ほど感じていた胃の痛みも嘘のようになくなってしまった。

翌日の初日を控えた舞台稽古では、気持のはずみも出て各人充分な手応えを感じていたようだ。

マスコミの取材は一七日の初日まで続き、満員の客席には、若者の数が目立った。（別表：入場者年齢別分布参照）取材をうけて、ある若者は「初めて文楽をみて面白かった」といい、また別な若い女性は「こんな身近なところで手軽に文楽を見られるのがいい」と答えた。「これを契機に文楽が見たくなった」というのもあった。会場で行われたアンケート調査でも、大方が好意的肯定的な感想を述べている。

この公演の会場となったラフォーレミュージアムでは、手狭な客席の都合で舞台はなは座布団座席を採用したが、ほんの鼻先で演じられる人形の演技をくい入るように見つめる若者たちを見ながら、悪条件が却って幸いしていると思った。そこには、普段劇場では見ることのない表情をした若者がいた。公演の試みは成功したのである。

別表　　入場者年齢別分布

S．62．6．17～21　原宿文楽
於：ラフォーレミュージアム

	文楽初体験	既にご覧の方	計
10代	10.5%	2.0%	12.5%
20代	35.3	14.5	49.8%
30代	5.6	4.2	9.8%
40代	3.2	5.9	9.1%
50代	1.3	8.7	10.0%
60代	1.2	5.1	6.3%
70代	0.3	2.2	2.5%
計	57.4%	42.6%	100.0%

・入場者総数 4,000名
・アンケート回収率：12.9%＝516/4,000

S．60．1．3～13
国立文楽劇場　初春公演

10代	4.7%
20代	17.5%
30代	13.6%
40代	16.1%
50代	21.5%
60歳以上	23.0%

・入場者総数　15,000名
・アンケート回収率：
12.6%＝1,896/15,000
・無記入　3.6%

ある出演者は、千秋楽夜の部の終演後、一時間ほどの帰り支度のうち楽屋口で、この公演から受けた感銘に対してお礼の言葉をいうために待っていた四、五人の若いファンの見送りをうけた。このような経験は初めてのことだったと興奮気味に語った。そして、この公演を支えた出演者、スタッフの大半は若者たちだったのである。

若者と文楽

四年前、研修のため上京し、原宿に同行した二女性は、今やベテランの女子職員として文楽劇場の日常業務に励んでいる。

K君は、女子大の講師の方の指導のもとに、文楽劇場周辺の文楽に由縁のある旧蹟等の案内を、小冊子「ぐるり見てある記」にまとめ刊行する仕事を手伝った。H君は、文楽を学びたい人への書籍案内リーフレット「文楽の本」をつくった。この若者と文楽との取合せにもマスコミは関心を示し、新聞、テレビに紹介され、世間は注目した。

その後、後輩の女子職員も一緒になって刊行した文楽誌「大阪ストーリー・マップ」では、近松の世界を、実地に大阪の地図の上に体験的再現を試みて話題になっている。

また文楽劇場には、冒頭にふれたように、伝承芸としての文楽の継承に、日夜励んでいる若い研修生たちがいる。

若者はしたたかに伝統芸能人形浄瑠璃文楽に取り組んでいる。若者たちの文化への希求、ハングリースピリットに対し、素直に応える以外に、民族遺産伝承の道はない。そして、この道の発見ほど至難の技はないように思う。

いま、来年六三年の原宿文楽の企画検討に入ろうとしている。この企画がより多くの協力者を得て発展して行くならば、これ以上の商売冥利はない。今年の原宿文楽の成功を支え、その成果に大きな満足と喜びを示されたラフォーレ原宿社長森稔氏、同館長佐藤勝久氏ほかの蔭の力になって頂いた方々に感謝し、将来に向かって原宿の若者文化文楽が、原宿の地域文化振興により大きな役割を果たすことを期待したい。

（国立文楽劇場主幹）

上演舞台　お初徳兵衛

次号目次

特集　大学改革の推進

巻頭論文

これからの大学の在り方と大学審　石川　忠雄
議会

座談会

開かれた大学をめざして
（出席者）石田名香雄／新野幸次郎
鵜澤　昌和／中村　桂子
（司会）遠山　敦子

論文

日本の大学像　天野　郁夫
大学改革への期待　飯島　宗一
大学一般教育の在り方をめぐって　楠川　絢一

資料

大学改革の推進状況について
・大学改革協議会（まとめ）　高等教育局企画課
・高等専門学校制度の改革　高等教育局技術教育課
大学教育の改善に関する参考資料　高等教育局大学課

解説

大学審議会の創設について　高等教育局企画課

編集後記

▽申すまでもなく、文化財にはその形態上の区別があり、「有形文化財」（建造物、絵画、工芸品など）、「無形文化財」（演劇、音楽、工芸技術など）「民俗文化財」（風俗慣習、民俗芸能など）、「記念物」（貝づか、古墳、名勝地、動植物、地質鉱物など）、「伝統的建造物群」（周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な建造物群）に分けられています。

▽さて、戦後混乱期のさなかの昭和二四年一月二六日、ショッキングな事件が発生しました。世界最古の木造建造物である法隆寺金堂から失火し、飛鳥芸術の精髄を伝えてきた壁画が一朝にして焼失してしまったのです。この事件を契機にして、文化財保護法が制定・公布されたのは昭和二五年五月のことでした。

▽以来、既に四〇年近くの時が経過しましたが、この間、国土開発の進展、国民の生活様式の多様化など、文化財を取り巻く状況は著しく変化してきております。

▽そこで、本号では文化財が、国民生活の中においてどのような役割を果たしてきているかを再認識するとともに、新たな動向を踏まえつつ、今後の保存と活用の在り方を探るために「文化財と国民生活」を特集しました。

（政策課）

MESC　61　月刊　「文部時報」　10　月　号　第1329号

著作権所有　文部省

昭和62年10月10日　印刷
昭和62年10月10日　発行

発行所　株式会社ぎょうせい

本　社　東京都中央区銀座7丁目4番12号
（郵便番号　104）
（営業所）東京都新宿区西五軒町52番地
（郵便番号　162）
電話　東京（268）2141（代表）
振替口座　東京9－161番
印刷所　株式会社行政学会印刷所

定価３００円　（〒50円）

年間購読料３６００円　（〒共）

・ただし，増大号，臨時号の場合は別に代金を申し受けます
・なお，購読のお申し込みは直接営業所またはもよりの書店にお願いします